

中野孝次文学の魅力

北 嶋 藤 郷

1 『わが少年記』

日本エッセイスト・クラブ賞に輝いた中野孝次の『プリュージェルへの旅』(1976)の冒頭の「闇」と題された章には、プリュージェルの絵に関しての言及はいっさいない。次のようにはじまる。

「そもそものはじめは紺の紺かな」とうたった詩人がいて、わたしはこの句にひどく感心した。 『プリュージェルへの旅』

この句は、中野が20代終りからの付き合いがあって、物の見方などにも少なからぬ影響を受けた安東次男の句集『裏山』にみる一句である。これは中野の好きな句で、「口ずさんでいると、またすべてを放擲して新しい無一文の旅に出立する人の決意のようなものが伝わってくる」と述べている。また、「蝸といふ名の裏山をいつも持つ」というもうひとつの句も紹介されている。中野は「わたしは紺紺の少年期を持たなかった。それが常套的に思い浮かべさせる、清冽な小川とか、鮎やどじょうや田螺のいる水辺とか、兎を追う山も持たなかった。その詩人は同じ句集で「蝸といふ名の裏山をいつも持つ」ともうたっていて、この二つの句はいつもわたしの口ずさむものだが、そんなたしかな永続的な生に裏付けされた「もの」の实在感もわたしにはない」と語っている。

自筆年譜によれば、中野孝次は、1925年(大正14年)1月1日、千葉県東葛飾郡市川町大字市川3180番地で生まれた。したがって、彼の満年齢は、昭和の年号と重なり、彼は昭和という時代をすっぽりまるごと生きたことになる。昭和初年の市川市は、東京のベッドタウンであり、当時の小学生に着物を着る習慣はなかった。と同時に、この郷愁句「そもそものはじめは紺の紺かな」が思い浮かべている安定した変わらぬ生活の実体というものも、そこにはなかったような気がする、と述べている。たしかに、人が生まれ育った故郷は、人間の生の原点である。風土が人間をつくり、人が風土をつくる、という循環型の生の営みが営々と積み重ねられて、「生の原型」をなしてい

るのだが、江戸川という大河をはさんで東京に隣接するこの町は、めまぐるしい変化変貌をとげつつある不安定な環境社会の雰囲気があったように思われる。

変貌の大きなうねりの中にあった少年期中野には、決定的な二つ精神的背骨となる“紺緋”と“鯛という名の裏山”をもたなかったにせよ、当時の子供たちの遊びには、まだ豊かな自然が残っていたであろう。「蟬とり、トンボつり、ベーゴマ、鬼ごっこ、陣取りなどの昔の遊び」（『鳥屋の日々』）や悠々たる江戸川の豊かな水流のなかで、その水を相手に泳いだり、釣ったり、四つ手網をあげたりした体験をも持っている。

自伝的自己確認小説『雪ふる年よ』には、江戸川の水浴場の描写が出てくる。関東ローム層の微粒子を運んできた川水は、濁って重かったが、臨海学校に行けない子供たちの天国であった。ヨシツ張りの水泳小屋の近くの飛び込み台には、真黒な少年たちが群れ、灰緑色の水中に飛び込んだ。「だれもこれ以外に水を知らず、拔手、クロール、犬掻き、平泳ぎ、片手抜き、背泳ぎ、水くぐり、なんでもこの抵抗の大きい冷たい水の中でこなしたのだ。」この群の中に、水泳帽子にふんどし一つの、陽気で茶目っ気な中野少年の姿もあったが、8月の太陽に灼けて、真黒のうえに、もともと地肌が黒いので、中野はエチオピアという仇名を与えられていた。また、小説『苦い夏』（1980）では、昭和10年頃、手児奈の秋祭りに、夭折した二歳年下の妹の秋子といたことが記されている。そして小説『光るカンナ屑』（1990）では、真間川ぞいの手児奈について、このように述べている。「あそこは真間川が江戸川に注ぐところで、当時はなかなか景色のいいとこだった。真間川の土手には桜がうわっていて、春先なんぞはそりゃきれいだったぜ。真間川も水が澄んで、その澄んだ流れの中に長い緑の藻が女の髪みたいにゆらゆらと揺れている。そこへ花ふぶきがパット散ったりしてね。」これは、恋の三角関係に悩み、入水自殺したと伝えられる真間の手児奈伝説さえ想起するような描写だ。

中野の最初の随筆集『花下遊楽』（1993）に「去年の雪いずこ」がある。わたしは上記の本を再読し、先年の5月、『わが少年記』（1996）を片手に、京成国府台駅に下り立った。真間川の清流が濁流の大河である江戸川に直角に流れこんでいる。そのむこうに覆いかぶさるように真間山の緑が眩しいほどに新鮮であり、国府台女学院高校生の制服の緑色も周囲に溶け込んでいる風情であった。ここは中野が生まれ育ち19歳まで過した故郷である。生まれ育った市川は、中野の生の原点である。昭和を走った中野少年のあし音を聞き、彼の姿を想像しようとしたが、うまく像を結ばなかった。この町を探索

がてらふと思った。文学少年肌の中野は、真間川のほとりの真間手児奈堂にまで散策して、古代伝説中の美少女をうたった山部赤人や高橋虫麻呂の歌から、遠く万葉ロマンの時代へ思いを馳せ、憧憬をいだいたのではなかろうかと。

葛飾の真間の入江にうちなびく玉藻刈けむ手児奈し思ほゆ 山部赤人
かつしか勝鹿の真間の井を見れば立ちなら平し水汲ましけむ手児奈し念ほゆ 高橋虫麻呂

井上靖や遠藤周作の強い支持を得て、芥川賞候補作にもなった小説『鳥屋の日々』を1977年に出版、翌年には『雪ふる年よ』『麦熟るる日に』を合わせて、自伝小説三部作として、平林賞受賞作『麦熟るる日に』が刊行された。中野孝次、53歳のときで、小説家までの道のりは遠く、文壇デビューとしては異例とっていいほど遅い。中野孝次は高名なドイツ文学者であり、ドイツ文学翻訳家というバックグラウンドからして、彼の作品はあえていうならドイツ文学の教養小説的なもの、あるいはイッヒ・ロマン（自己小説）といったもののジャンルに入るものである。

2 『麦熟るる日に』『苦い夏』

中野孝次の両親は、北関東の農村部の出身である。昭和の初期にやっと電気がひけたくらいの辺鄙な田舎であった。市川に出てきた父末吉は、大工の棟梁をしていたが、豊かとはいえない暮らしをしていた。母は幸ゆきといい、孝次は6人兄弟の次男として生まれた。

中野孝次の「自筆年譜」によれば、「昭和12年、市川尋常高等小学校尋常科を卒業、4月から高等科に進む」とある。中野の満年齢は昭和の年号と重なることはすでに述べたが、2年後には高等科を卒業する。職人気質の父親は、傲慢で無教養で暴力的で無骨な一刻者であったので、孝次の中学進学を許さなかった。「職人の子に教育なんかいらぬ」、あるいは「なまじ学問があると生意気になっていけねえ」の一本槍で、孝次が泣いて頼んでも進学は許されなかった。

父親の大工仕事の手伝いをさせられたりしながら、孝次は検定試験をとるため独学をはじめ。昭和17年で高等学校入学者資格検定試験（専検）に合格。予備校に通う。18年、松本高校を受験するも不合格。自信満々で受けた一次試験にパス、二次の口頭試問では不合格となった。高校生気取りの朴歯の下駄、汚い手拭を腰にたらし、蓬髪頭の生意気スタイルが試験官の心証を悪くしたか。

19年の春、第五高等学校文科を受験して合格する。文乙合格は、20名。この年から文科生に懲兵延期の特典は失われていたが、それを承知で文科を受験した者ばかりであった。

20年、文科生は全員、熊本市にある三菱航空製作所に学徒動員された。時は太平洋戦争も末期の状況にあり、もう日本には歯向かいするために地上から飛び立つ戦闘機がないとわかると、アメリカ軍のグラマンという小さな戦闘機の編隊が超低空から空襲をしかけてきて、機銃で一斉掃射を浴びせた。操縦士の顔が見えるぐらいの低さで飛び、彼らはバババババッと機銃でなめていくのであった。この製作所でも、このような非戦闘員が殺戮の犠牲者となったものもいた。

戦時下にある当時、満20歳になると市町村役場から徴兵検査の通知が来た。中野は、熊本から極度にひどい交通事情であったが、市川に帰り、自分が通った市川尋常小学校の雨天体操場で徴兵検査を受けた。徴兵検査とは、身体検査のことだが、実施者は軍隊であり、やり方も軍隊式であった。だから当日は全員頭を坊主刈りにし、越中ふんどしをして、集合場所に出頭して、ものの言い方も軍隊式に「はい!」、「何々であります」と大声で言わなければならない。

とって、特別のことをするわけではなかった。身長、体重をはかり、視力をたしかめ、健康度を見、性病と痔疾のあるなしを調べる。性病の検査はきわめて原始的なもので、検査官が陰茎をぎゅっと握ってしごくのである。淋疾など性病のあるものはそうすると白い膿が出てくるのでわかるそうであった。また痔疾の検査には腰を高くあげたまま両手を床について尻を見せるのだから、姿勢そのものが屈辱的だったが、これも徴兵検査のうちなのであった。

『五十年目の日章旗』

結果は甲乙丙丁戊の5種にわけられた。中野孝次は、からだは頑健であったが強度の近視眼なので第二乙種合格の判定であった。つまり「身長1.5メートル以上ニシテ身体第一乙種二次グ者」の判定であった。ちなみに甲種合格とは、「身長1.52メートル以上ノ者ニシテ身体屈強ナル者」であった。この身体規定に戦争以前は1.55メートルとされていたのだが、それでは兵隊が十分とれなくなかったので水準を下げざるをえなかった。これを見ても、いかに当時の若者の戦死者が多く、消耗が激しかったかがわかるのである。それにしても甲種合格の身長1.55メートルは低い。1920年の日本人成年男子の平均身長は、1.57メートルであった。1955年時点での日本人18歳男子の平均

身長は、1.70である。

この年の5月末、召集令状を受け、宇都宮東部第三十六連隊に入営。8月15日、昭和天皇の終戦放送を中隊の営庭で聞いた。中野は「助かった」と歓喜が湧いた、と記している。

当時の旧制高校生が愛読した西田幾太郎の『善の研究』や倉田百三の『愛と認識との出発』などは広く読まれ、昭和戦前期の教養主義の必読書であった。わけでも漱石門下の阿部次郎は、大正教養主義文化を代表する伝達者となった。阿部の『三太郎の日記』や『人格主義』は、旧制高校生の教養主義のマニュアル本であり、大正教養主義のバイブルであった。阿部次郎が師の漱石をまねて木曜日を面会日にしていることを知った中野は、昭和19年の7月、友人とともに、熊本から日に二本しか出ない長距離夜行列車に乗って、はるばると仙台在住の阿部に会いに行った。二日並んでやっと切符を手にして乗り込んだ戦時下の夜汽車は、混雑をきわめ、駅ごとにもみ合いと怒号がさらにひどくなった。

「死ぬのは仕方ない、いま日本中が滅亡の前にたたずんでいるのだから、と思う。しかし、死ぬなら知ってから死にたい、知らなければ死ぬにも死にきれない気がする。なによりも、自分はまだ人生を知らず、人生を考えようにも思索する方法さえ知らぬという思いが、ほとんど生理的な苦痛となつてうちから突き上げてくる。」中野はこのようなのっぴきならない精神状態にあり、『三太郎の日記』の著者・阿部次郎を尊敬するからこそ、遠い日本の反対側から、アドバイスを求めてやってきたのであった。

まず友人の青木亮が、国家とは、国体とは何かについて、一語一語押し出すように切り出した。「ぼくらもうじき戦争に行かなやならんです。が、正直いって、なんでこんな軍人たちが始めた戦争で自分らが死なにやならんのか、ぼくにはようわからんです。(略)たしかに、死ぬと言っても国のために死ぬんですから、その死に意義があると信じられればよこんで死ぬるかもしらんですが、それがようわからんから悩んどるんです。ぼくには国というものがようわからんです。具体的に、自分がそこで生まれ、父や母や友人やが生きている国土を思いうかべると、それが国という気もするのですが、国家とか、国体となると、もうわからなくなってしまうんです。こないだ読んどった本に、部分の総和は全体にはならぬ、全体とは部分の総和以上のものであるとあって、これにはずいぶん考えさせられました。そうかもしれんという気がするんです。国というものがあって初めて個人がある、個人の総和以上の絶対的なものが国家というものか、と思いました。まだ釈然とせんんですが、もし国家とはそういうものなら、その日本の存続のためにいのちを

捧げるのは、意味がある、と信じられる気もするんです。だがそれでもぼくには国家という抽象的な存在がようわからんです。先生、国家と個人とは、どう考えたらいいんでしょうか。」

これを聞いている中野は、おれたちの仲間の青木も一人でそんなことを考えていたのか、と背筋の毛ばだつような感激を覚えた。彼は本当に腹にこたえることだけをいっている、と思い老先生の反応をうかがった。「が、膝に手をおいて背を丸めてきいていた老人は、小さな目で青木を見返したが、しばらく何も言わなかった。それからほとんど抑揚のない低い声で、あなたのいわれたそのアリストテレスの説は、というような言い方で、古代ギリシャの哲学の全体と個の問題について話してくれたが、それは知識のなかに逃げこんだという感じを与えた。」中野はこのぼそぼそ低い声で答えた老人にたいして、あたりさわりがなくて、老獪な用心ぶかい人という不満をもった。青木の言い分に人間として率直な反応を示してくれることを期待していたのだ。たしかに青木の言った言葉のなかには、憲兵にでも聞かれたら即座にひっこくられかねない危険な要素も含まれてはいたが、老人は何を警戒したのか、明らかにほぐらかしたのだった。わからぬとならわからぬとでもいい、老教授はなぜ率直にうけとめてくれないのか、という不満が、しだいに中野のなかで募っていった。中野はさらに強い乱暴な言葉をぶつけたくなって、つい口をきった。

「正直いって、さっきから先生の話聞いていてもぼくにはよくわからんです。そのよくわからん自分を情ないと思いますが、一方では結局学問とか芸術とか、要するに教養というものは、平和で時間のいくらでもある人たちの贅沢で、ぼくらのいまの悩みにじかに答えてくれるものではないんじゃないかって疑いも湧いてくるんです。哲学とか倫理学は人生のことを考えているみたいだが本当はそうじゃなくて、実はなにか、人生とじかに関わらない間接的な思索の大系じゃないか。が、自分がいま切に聞きたいのはもっと直接的なものだ、生きている人間の全部が現れた声、魂の息遣いのようなもの、つまり人間そのものだ、と思うんです。哲学や、総じて学問は、いかにも壮大ですばらしいけれども、どうも人間が生きることに直接には関わらない、ひどくまどろっこしいものだという気がしてならんです。ぼくはたった一言でもいいんです。こっちの魂にひびく声がかきたい、どんな張三李四でも匹夫野人でも、生きている人間なら必ずその心の奥にひびく声があるはずだって気がします。それをきけばどんな人間もが即刻そのまま絶対的ななにかとして肯定されるものがあるはずだって気がするんです。学問や教養がなけ

れば人間はだめだっていうんなら、無知のまま死んでいく人間は人間じゃないってことになる、それじゃうそだと思うんです。」 『麦熟るる日に』

小柄な老先生は背をまるくしてじっと目をたたみに落として、黙りつづけていて、なにも言わなかった。「生きる時間が限られている」のに「人格主義」といってもどうしようもない、と中野や同行の二人の友人たちは考えていた。この老教授のサロンの「知的会話」は、中野たちの生きている九州での切迫した空気となんとかけ離れていたことであろう。今は悪い時代だが、「どんな時代でも人格的完成という理念が無価値になるわけがないという意見」と「いまここで未完成のまま断ち切られる生を抱え込んだ若者」とでは、意見はしょせん噛み合うはずもなかったのである。

『ブリューゲルへの旅』の後半部、「夏」と題された章も冒頭の「闇」と同様にブリューゲルの絵に関する言及は一言もないが、この仙台に阿部次郎をはるばる訪ねたエピソードが描出されている。もうすぐ戦争に駆りだされ、そこで命を絶たれる運命にある若者たちにとって、書齋で語られる老教授の人格主義は、なんら役に立たないものようであった。「無縁な、飾り物的思想というのが、三人共通の印象であった。われわれは熊本に戻るとまもなくあの老教授の本をみな売払った」とある。

竹内洋著『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』の5章「文化戦略と覇権」には、「独文学者中野孝次の半自伝小説『苦い夏』に、教養をつうじてのブルジョア文化階級化の隠蔽された微妙な動機を読むことができる」という興味深い指摘がある。憧れの旧制高校入学後、中野は暇さえあれば読書に勤しみ、高等学校の教養主義文化、即ち西洋の古典や小説の世界に耽溺した。あるとき彼は、友人の重国正義から「そうやって新しいものに次から次と気をとられるあんたを見てると、どうもあんたには度しがたいスノビズムが巣喰ってるのかもしれない気がするぞ」と指摘されてしまう。孝次は胸に熱い鉄棒でも打ち込まれた気がして頬が歪んだ。反発する声が甲高くなった。「スノビズムって、どうして」と孝次は問い返す。「つまりだな、あんたは美だの精神だのってよう口にするがな、もしかすると自分もそいつらみたいがいい暮らしがしたいだけかもしれないと思うことがあるよ」と正義は答える。

『苦い夏』は、『麦熟るる日に』に続く感動の自伝小説・戦後編といいいいであろう。大岡昇平は「戦後の青春群像が、作者の誠実さと執拗なる追及によって、見事にここに甦っている」と絶賛している。中野は『絶対零度の文学 大岡昇平論』(1976)の中で、大岡を「戦争によって徹底的に自己を

検証させられた人物」と呼んでいるが、『苦い夏』は、戦後の混迷の時代にあつて、自己解体とか自己喪失の時代の空気に抵抗して、自己探求と自己確認とそして自己確立の物語である。

上記の書『教養主義の没落』によれば、学校的教養である教養主義では、成熟したブルジョア文化に太刀打ちできなくなる、という。東京の旧山の手居住地は屋敷町として際立ち、上層中流階級文化として成熟していったのである。中野の小説『苦い夏』の「悲劇は学歴上昇移動ができなかったことによるのではない。学歴上昇移動をしてしまったがゆえの悲劇なのである。」1960年代、わたしが学生であった東京の後楽園キャンパスでは、教養主義はまだ大学の規範文化であった。人格形成とひいては社会改善のための読書中心の教養主義は、なぜわれわれをあれほど魅了したのであろうか。旧制高校に端を発し、その後の半世紀間、日本の大学に君臨した教養主義の輝ける功績とその後の衰退過程の実態は、世代交代の流れのなかで、光と影となり現代の世相を映し出している。著者の竹内自身の出自は佐渡島であるが、「当時の高校教師はどうみてもいまの大学教授より威信があつたようにおもう」と語り、高校時代に教師に薦められて、『三太郎の日記』や『善の研究』を読破したことを告白している。彼は高校生のときからプチ教養主義者であつた。(竹内引用は、『苦い夏』の「険しい朝」の章からのものである。)

3 『五十年目の日章旗』

太平洋戦争の激化にともない、文科学生への徴兵延期廃止につづいて、昭和18年10月21日、秋雨煙る神宮外苑競技場で学徒出陣式が盛大にとり行われた。角帽の下に白たすきをかけ、三八式歩兵銃をかついで雨中を行進する大学生の映像は、何回観ても胸を衝かれるのである。この年の4月、連合艦隊司令長官山本五十六は、ソロモン上空ですでに戦死していた。

この壮行会は、文部省の主催で、時の東條英機首相が檄を飛ばした。送られる学徒25,000人、見送る家族や女子学生など65,000人を動員して、出陣学徒の壮行会は举行された。全日本学徒が武を練り、技を競ったこの競技場から、大多数が戦地に赴き、何人が生還したかを知らない。しかし、生還者はもう80歳を越えているだろうが、この戦争体験を風化させることなく、戦争を知らない日本の若い世代の人々に、語り継いでもらいたい。戦時の国家権力は、いわゆる白線地帯という聖域にあつた学生たちの学問もゆるさず、根こそぎ引っっこ抜いて、彼らを南方戦線という死地に送りこんだのである。赤紙(召集令状)は、まさに死への切符も同然であつた。門出にさいして、「祈武運長久」という白い褌をかけ、出征兵士が千切れるように振って戦地

に赴いた国旗には、よく下記の防人^{さきもり}の歌が揮毫されていた。

けふよりは顧みなくて大君の醜^{しこ}の御楯と出で立つ吾は

中野孝次より9歳年上の兄・幸太郎は、身長は充分だが虚弱体質であったので、兵役検査では丙種合格であり、第二国民兵役になっていた。国民兵役とは、戦場要員として兵隊にとられないが、本土決戦など最後の時には徴兵される者とされた。が、幸太郎は、身重の妻を残し、昭和18年に召集され、宇都宮東部第三十六連隊からビルマに送られ、インパール作戦に参加して散華した。史上稀な愚劣きわまりない作戦で死んだ兄のことを思うと、中野の胸中は悲憤に駆られずにはいらなかった。ビルマ戦線は会戦そのものも凄じかったのだが、インパール死の行軍は、毎日があてのない彷徨、飢えと渇き、マラリヤとアメーバ赤痢との戦いでもあった。日本兵は木の葉を摘みて飢えを凌ぎ、野草に命を託すという、まさに白骨街道の生地獄であった。大陸戦線では通用した現地調達もビルマのジャングルのインパール作戦では通用せず、文字どおり「泥水すすり草をはみ」、炎熱の中を重装備で道なき道を行進中に、餓死や熱病で白骨街道を築くことになった。

幸太郎は、優しい人柄で母親の愛情と信頼を受けていた。市川尋常高等学校の高等科を優等で卒業すると日本橋の某問屋の住み込み小僧として就職した。成績がいい以上は、幸太郎だって上級学校へ進学したかったであろうに、家の貧しさを思って黙ってその希望を圧殺してしまったらしい。のちに、このつつましい家族に苛立ち、そこからひたすら逃げ出そうと孝次が両親に進学を迫った時、父は「職人の子に学問はいらない」の一本槍であったし、母は兄の例を引いて、「兄ちゃんだって一番だったのに、高等科でおえてるんだからね」と、それを絶対の切り札としてはねのけたのであった。兄・幸太郎が伝説的な優等生であったという証左として、中野家の床の間には、授与された大理石の置時計があって、その裏には金文字で兄が優秀な成績で高等科を終了したことが記されていた。

『智恵子抄』で知られる詩人・高村光太郎は、死について、このようにうたった。「死ねば死にきり。/ 自然は水際立っている。」「(死ねば)」と。また、愛する「智恵子はすでに元素にかへった」という。智恵子は黄泉の国へゆかず、光太郎の肉体に宿り、光太郎の細胞を燃やし、光太郎と戯れ、光太郎をたたいている。元素となった智恵子は、光太郎を「老いぼれの餌食にさせない」(「元素智恵子」)のである。

そもそも身内の悲しみなどは、黙して語らず、詩人や作家といえども沈黙

をとおしてしかるべきであるかも知れないが、表現者としての中野の責務がこれへ駆りたてたものがあった。中野は沈黙してはいられなかった。

兄・幸太郎を偲んだ、鎮魂の書『五十年目の日章旗』の「日章旗出現」の章には、戦後まもなく流行った言葉として、埴谷雄高の句が引用されている。実際、戦死した家族の思い出が生々しかったあのころ、あえてそんなふうにも思わなければ、辛い思いを振り払うことができなかつたのであろう。

—死んだ者はもう帰ってこない

生きてる者は生きてることしか語らない。

『永久革命者の悲哀』

中野は、『五十年目の日章旗』のジュニア向けのダイジェスト版『ぼくと兄の日章旗』の中で、「ぼくもまた、兄の死を悲しんでも、自分は毎日生きていかねばならず、生きていれば腹がへっては食料を思い、住居がなければ部屋さがしをせねばならず、毎日毎日の労苦の中にまぎれて、いつか兄のことなど次第にうすらいでいってしまった。まさに『生きてる者は生きてることしか語らない』のだ。」この言葉のシニジズムには、いささか鼻白むものもあるが、これもまた真実であると納得せざるをえない。

回首すれば、二十世紀は、戦争とイデオロギーによる虐殺の時代で、軍国主義の世紀であった。

1904年、日露戦争。日清戦争から10年で、日本が国運を賭けた大ロシア国を相手に日露戦争に突入。日本中が一つになってロシアと戦い、なんとか幸運にも勝利した。この戦争の勝利がそれ以後の日本をおかしくした。

1918年、シベリア出兵。ロシア革命のどさくさに乗じて、大義名分もなくロシアに出兵。まるで火事さわぎに火事場泥棒にでかけたようなもので、世界中から非難され、ロシア人からも長く恨まれる結果を招いた。

1931年、満州事変。昭和になってからの日本帝国陸軍はとくに、侵略意欲の盛んな、狂信的な軍人たちによって支配され、満州を日本のものにしようとしてはじめてのがこの満州事変であった。

1937年、日中戦争はじまる。昭和6年以来の満州事変の解決がつかないまま、こんどは広大な領土を誇る中国全土にわたる中国への全面的な侵略戦争をはじめてしまった。はてしない泥沼に踏み込んだような戦争で、中国にたいへんな不幸と災害をもたらした。

1941年、太平洋戦争（大東亜戦争）がはじまる。ABCD包囲網を敷かれた日本は、日中戦争の片がついていないままであったが、日本軍は、こんどはとうとう米・英・蘭を相手に世界戦争に突入してしまった。アジア各地と

日本中を戦禍に巻き込み、多くの人を殺し、不幸をもたらした。この悲惨な戦争は1945年の敗戦まで続いた。

こうして、ざっと挙げただけでも、明治維新、換言すれば、日本に近代国家を創出して以来、日本はほとんど絶え間なしに戦争ばかりしてきた。このように考えると、1945年の敗戦から62年もの長いあいだ、わが日本に一度も戦争がなかったということは、近代日本にとっていかに珍しいことであったかがわかる。

戦争というものは、ただひたすら悲惨、残酷、非人間的なものだ。どんなに立派な大義名分があても、英雄的な面などまるでない、要するに人と人との殺し合いであり、国家の名でおこなう殺戮行為である。かつての日本軍隊にあっては、何より絶対服従が重んじられた。日本軍兵士になることは奴隷になることであった。太平洋戦争の敗北によって、国家が第一の価値ではなくなって、初めて人間の生活がはじまり、人は奴隷であることから解放された。1945年以後の日本は、その意味で、日本の近代史上初めて、人間が国家より優先する時代になったのだといえる。不幸なあの太平洋戦争のような戦禍を二度と味うことのないように、われわれはいつも監視の姿勢を堅持する必要がある。中野の『ぼくと兄の日章旗』は、ドイツの哲学者ニイチェの言葉、「国家が終わるところ、そこに初めて人間が始る。余計な人間でない人間が始まる。必要な人間の歌が始る。一回限りの、かけがえのない歌が始る」を引用して、下記のように結んである。

きみたちはいつも目を光らせている必要がある。人間にまさる価値が人間を圧迫することのないように。
『ぼくと兄の日章旗』

日本の旧制高校の中でも一高から五高の地位は高く、駿才高としての誉れは高い。古くは小泉八雲や夏目漱石が教壇に立ち、その薫陶を受けた五高生は「剛毅朴訥」を旨とし、地域の人々の評価も高かった。中野が五高に入学した昭和19年、すでに太平洋戦争の敗色は濃く、熊本でも勤労学徒動員と空襲に怯える日々が続いた。昭和20年5月、中野は召集され、宇都宮東部第三十六連隊に入営し、陸軍二等兵になった。そこではリンチやビンタが横行し、自我が圧殺されるなか、中野は戦争を始めた軍部支配層への怒りを滾らせた。8月15日の敗戦の日には、軍律は壊滅して、上官たちの略奪が始まったとき、中野は日本帝国陸軍の実体を観察し、それまで支えてきた旧体制と皇軍教育への憎悪を新たにした。復員後、五高に戻った中野に届いたのは、兄・幸太郎戦死の知らせであった。

50年後の平成6年（1994）、元英軍将校の遺族のもとで1枚の日章旗が見つかり、元の所有者を捜す小さな新聞記事「この日章旗に心当りは・・・」が載った。中野は驚き、さっそく名乗り出た。為中野幸太郎君、陸軍中将若荷英雄と揮毫されていた。当事者らは皆すでに亡く、兄・幸太郎の遺品である完全な確証を得るにはいたらなかったが、愚劣な作戦で命を奪われた兵士たちの鎮魂のためにも、この日章旗を中野は引き取り供養した。兄のくれた日本橋三越の商品券で購入した電気スタンドを中野は、度重なる転居にも手放さず、兄の遺品代わりに生涯身近に置いていた。

4 『ブリューゲルへの旅』

『ブリューゲルへの旅』は1976年2月に発刊された。この本こそ中野孝次という作家の文筆活動すべての根源となる出発点であった。作品の鑑賞は、あくまでも自分のなかでのブリューゲルとのダイレクトな対話である、という姿勢を中野は一貫して堅持している。ダストジャケットには、「農民の結婚式」が使われている。花嫁は冠の下にいるふっくらとした女性であるが、花婿はだれであるか特定できない。祝宴は納屋でおこなわれていて、熊手と一緒に十字の形に組まれている藁束は、厳しい労働を伴う収穫作業を思い起こさせる。食事の皿は戸板を使って運ばれている。当時の主食はパンと粥とスープであった。

本学の図書館には、「中野孝次記念文庫」が収蔵され、近くの白壁には、「狂女フリート」（115×161cm）の複製画が架かっている。『ブリューゲル全作品』の森洋子解説<悪魔と戦う女>には、「地上最後の日が到来したかのように、いたるところで火災が起き、地上からも火が噴き出してくる大災害の中、どこからともなく魔物、怪物、悪魔、胴なし人間など、ありとあらゆる種類の不気味な生き物が地面にはい出してくる。他方、右手に剣をもち、頭にヘルメット、胸に甲冑をつけ、左手の籠、鍋、袋のなかにはかかえきれないような戦利品を入れた女が、猛然と挑みかかってゆく。彼女の名はドゥレ・フリート、つまり「悪女フリート」である。」（原画名はThe Dulle Grietとされているところから、美術評論家たちは、「悪女フリート」と呼んでいる。曾野綾子著『ブリューゲルの家族』では、「気狂いメッグ」（Mad Meg）として颯爽と登場してくる。中野は『狂女フリート』としている。）

中野孝次はアントヴェルペンのマイヤー・ファン・デン・ベルク美術館で『狂女フリート』に初対面した時の驚きの印象を下記のように表現している。「さまざまな魔物がいる。地獄が口を開けている。城壁の上、掘割の中、地上いたるところに奇妙な戦いが行われ、世界は上下左右の秩序も均衡も遠近

法も失われ、すべてたがが外れてしまったかのようだ。その混乱したアナーキーな世界に、奇怪な、ボッシュの悪魔の世界からとび出してきたような怪物たちが懸命の戦いをしている。魚、すっぽん、蛇、いもり、蟷蛙、鳥、ざりがに、蜘蛛、その他わけのわからぬ混成怪物たちが、尻口にスプーンをくわえ、あるいは人間の足を呑み込み、ハーブをひき、踊り、這い、跳ねまわっている。頭巾を巻いた女たちが魔物をうちひしぎ、屋根の上の女装した男が尻の穴からかきだす金貨を奪いあう。だがその女たちの十倍もある巨大な狂女は、もはや略奪にも地獄征伐にも無用と、長大な剣をつきつけて、画面を左に闊歩しさろうとしている。鉄兜の下の愚かしげな思いつめた顔は口を開け、目をひたと前に据え、腕にかけた籠にはフライパンや宝石箱が詰めこまれている。そして地平には猛火が空を焼いている。」

ブリューゲルは、若いころからネーデルランドの諺に関心をもち、自分の絵にも諺を導入している。「狂女フリート」では、「悪魔をクッションの上で縛る女」が描かれている。男まさりで、腕っ節が強く、悪魔さえ制圧するほどである。日本にも「女房の尻に敷かれる亭主」というのがあるが、それに近いかもしれない。曾野綾子は「気狂いメグ」の中で、「全く、洋の東西を問わず、おかみさんたちの集団ほど怖いものはない」とおかみさんパワーを礼賛しているようだ。

ローズ＝マリー・ハーゲン/ライナー・ハーゲン著『ピーテル・ブリューゲル』の「身近にいる悪魔」の章で、民話上の人物フリートに関して、「女性を好ましく表現するための原則を、ブリューゲルはことごとく逆にして見せている。唇には微笑のかけらも見えない。額を飾る髪もない。肌にはつやがなく、歯のない口はぼかんと開かれている。服はみすばらしく、鎧は胸の優美さを奪って、腹の前に垂れ下がっている。そして彼女はこちらに優雅に視線を向けるかわりに、顔を背けたまま、手に入れた獲物を安全なところに運ぼうと重い足どりで走っていくのである」と表現している。

ハムレットの台詞に「世の中のたがが外れてしまった」(The time is out of joint.) というのがあるが、この絵はまさに中世的な神の秩序が崩壊した地獄絵である。この時代には悪魔や悪霊は身近にいる現実的な存在であった。特異な気象現象、疫病、病気、奇形など客観的に説明不可能なものはすべて悪魔や悪霊の仕業である、と信じられた。実際にひっ捕えて罰することができたのは、悪魔や悪霊に使える人間、つまり魔法使いや魔女であった。とりわけ女性が悪魔と結託していると疑われ、何千人もの女性たちが拷問にかけられ、死刑を宣告され、火あぶりになったりした。

ここで、そもそもブリューゲルを日本に最初に紹介したのはだれか、との

思いをめぐらすがわたしはその答えを知らない。齋藤茂吉は、初期の紹介者のひとりといえそうだが、茂吉がブリューゲルの原画を鑑賞し、感動してそれを短歌に詠んでいるかどうかも知らない。

東北人の強靱な精神力と集中力で己を律し、近代短歌を確立した茂吉が念願のウイーン留学の途に着いたのは、大正11年、茂吉40歳の時である。目的は、ウイーン大学精神学研究所長マールブルク教授 (Prof. Dr. O. Marburg) の許で指導を受け、研究に励むことであった。『齋藤茂吉歌集』の「遠遊」、維也納歌稿 其一には、次のような短歌が載っている。

大きな^{みて}御手無造作にわがまへにさし出されけりこの^{せきがく}碩学は
ドウナウの流れの寒さ一めん^{へん}に雪を浮かべて流るるそのおと

森洋子編著『ブリューゲル全作品』(1988)を抱きかかえて膝の上に置いて、茂吉の「ピエテル・ブリューゲル」を精読している。茂吉の文章の迫力に押されて、本の重さを忘れてしまうほどである。

西暦1922年1月22日、茂吉は雪降るウイーンの町の美術館で、ブリューゲルに邂逅した。茂吉のエッセイ「ピエテル・ブリューゲル」によれば、彼の観た絵は「サウルの自殺」(The Suicide of Saul: 33.5×55.0cm)である。サウル王は基督紀元前約千年にイスラエル国を統治していたが、雲霞のごとく攻め寄せるペリシテ人の大軍に敗れて自害する。これはブリューゲルが旧約聖書を主題にした最初の作品である、と膝上の書の解説は教えてくれる。

茂吉は、僕は日本に生まれて、山国の農家に生息したのであるが、童子にしてすでにさむらい自害の図を見た。長じて東京に上り、幾度も敗軍の自害図を見た。けれども、遥々とウイーンに来てこのユダヤ王自害の図を見た時には、僕の心に一つの感動が起こっていた、と書いている。茂吉はブリューゲルの絵に触れながら、「保元の乱絵巻物」に対するような気持になった。彼の絵にひよっとしたら東洋流のところがありはしまいか、と思ったりした。「僕は、此の畫家は只者ではないと思った。そうして僕の心の寂しくなる時は、いつも美術館に来てこの畫家の繪の前に立ってゐた」という。茂吉はの孤独は、ブリューゲルの絵によって救われたのであった。それから44年後、1966年の春、中野孝次は同じウイーンで、ブリューゲルにつかまったのである。中野もまた、憂鬱にとりつかれ、憂鬱をもてあましていた。憂鬱は常に彼の胸にあり、それは胸を噛んだ。

中野孝次は、41歳の時、一年間ドイツ文学研究のためにドイツに留学した。

研究休暇をくれた大学からの要請は、秀夫人の直話によれば、「現地ですぐに一度だけドイツ語で講演をすること」であった。留学中、彼が今まで西洋文学ばかりに肩入れしてきたのは、誤りではなかったか、という疑念にとりつかれる。帰国してから数年、日本の古典ばかり読み耽った。その決算が45歳の時、ひと夏、志賀高原の北の山小屋に籠って、遺書を書くつもりで書き上げたのが『実朝考 ホモ・レリギオーズスの文学』（1977）である。実朝の代表的な歌を二首紹介しよう。恐ろしいエネルギーが込められた歌である。

大海の磯もとどろによする波われてくだけてさけて散るかも
山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも 源 実朝

実朝は、荒々しい関東の武家の棟梁でありながら、気持は京の文化に惹かれて、一身を二つに引き割かれたような存在であった。帰属の場を喪失しながら虚空中に屹立した詩心の軌跡を映し出した力作である。実朝の歌は単なる情景描写ではなく、動揺する実朝の心の揺らぎの描写と読める。この本の書評で、寺田透から「実朝論なら実朝だけを論じるがいい、自分をだすな」と手ひどく批判された。事実追求癖とでもいったらいいか、対象を徹底的に究めずにおかぬ寺田流の批評だ。が、痛棒をくらっても中野はびくともしなかった。確かに実朝を論じた評論であったが、中野には自分を確かめるところに狙いがあったわけで、批判とは逆に、彼自身の方法へ深入りする決意をかためさせたのであった。

『ブリューゲルへの旅』では、さらに自分を出す書き方をし、これを成功させた。他者を通じてではなく、もっぱら、自己を対象としてもものを書くようになった。なるべく評論的客観主義に陥らず、これを論ずる自分の中心部まで書きたいと考えた。この本の出版記念会で、作家の水上勉や秋山駿が「この次はもう小説をかくしかない」、と励ましてくれた。

『ブリューゲルへの旅』の出版された年、中野は「絵画の言葉」（『芸術生活』1976.10）という興味深いエッセイを書いている。やや長くなるが引用しておく。

絵は一度にすべてを語りかけてくる。ただし、語りかける絵は、だ。というのは、語りかけてこない絵もあるわけで、こういう絵はいくら見つめていても何も語らない。これは無縁と諦めるしかない。だが、一度にすべてを語りかける絵の印象は圧倒的で、これはとても言葉にほぐしきれるものではない。たぶん誰もがこういう経験を持っているのだろうと思う。

角田房子さんは、私もプリューゲルが好きでよく見たが、プリューゲルは私にまったく違うことを語りかけた、あなたに語りかけた言葉とは全然違うものだった、といった。そうだろうと思う。一つの絵がまるで違う言葉を語る。観者の感受性はその人の生まれ育ちの過去から今の思想の全部にまでつながっているから、人毎に違うのが当然だ。問題はただ絵がいつまでも一度に全部を語りかけてくると感じられるとき、絵はその人物の存在の最深部を撃っているということだ。言葉もとどこかぬ最深部を、である。それをうまくほぐして、もつれた糸玉を一本のきちんとした糸にして引き出すように、とりだすのが難しい。(略)

画論や画家論を読んでいて、不満に思うのは、いわゆる美術の専門家たちが、時代考証だの、流派の系統だの、画風の特色だの、客観的な知的側面しか語らないことだ。かれらだって専門家である前にまず、感受性の全人間的背景を持った人であるはずだから、「あれもこれも」ということではなく、必ずや「あれかこれか」のきわどい切所を、芸術世界全体の中で持っているはずである。何でも彼でもわかるというのでは困るのだ。それじゃ人間が絵を見ている感じがしない。私にとってはこれしかない、これはこう私に語りかけた、と、そこをじっくりと言葉にしてもらいたいのである。知識の羅列では困るのだ。

「なるべく評論的客観主義に陥らず、これを論じる自分の中心部まで書きたい」というのが中野の文芸方法論である。美術の専門家たちにしても、作品ではあくまでも自分自身の中でのプリューゲルとの対話であるはずなので、ストレートにそれを出して欲しい、と中野は注文しているようだ。

プリューゲルが妻に残した作品といわれる「絞首台にカササギのいる風景」(45.9×50.8cm)のカササギの姿で表現したかったのは、他人の陰口を叩くのが好きなおしゃべり女であり、そういう連中は絞首台送りに値すると考えているようだ。ここでは、「特にプロテスタントの犠牲者の運命を暗示している」ともいわれている。「絞首台の下で踊る」という諺は、危険を恐れない、あるいは危険をかえり見ない、という意味である。「絞首台に糞をする」とは、権力や死を恐れない、という意味である。

中野はこの絵に実に奇怪な想像をめぐらしている。「明るい夏の日の下この絞首台に吊るされるのは、ひょっとしてプリューゲル自身であって、彼はその吊るされた者の目でこの自然を観照しているのではあるまいか、と。」

富岡幸一郎は、『中野孝次作品01』(2001)の解説で下記のように論述している。『プリューゲルの旅』で中野孝次が試みたのは、むしろ「自己検討」

といった近代知識人の性癖そのものを破壊することであった。だから、プリューゲルをだしにして、「自己」を物語ったり検討するという作業がここでなされているのでは全くない。本書の魅力は、逆に著者自身の「自己」がだしになって、プリューゲルという巨大な画家の姿が、その不可思議な、しかし確固たる絵画の世界があきらかにされようとしている点にある」と。

たしかに野間宏の世に出る作品となった、『暗い絵』(1946)の難解で粘液質な文体、思考方法、感受性は、戦後文学の第一声と位置づけられた。その文体の新しさと人々を驚かせた。この作品は、「狂女フリート」や「反逆天使の墜落」をモチーフにしたものである。野間は原画をみているわけではない。桑原武夫にプリューゲルの絵を使って、書いてみたいと話し、下村正夫からプリューゲルの「画集」を借りて観たのみであった。

中野孝次がインタビューとなった『対談 小説作法』(1983)では、野間宏との対談で、『暗い絵』を中野は、「なんたる暗い文体であろうか」と言い、「それにしても『暗い絵』の冒頭の、あのわけのわからん描写—」と臆面も無く語っている。野間の暗い文体は、外国文学で培われた文学観と作家の体質的なものによるものであろう。

野間の暗いプリューゲル観によって、戦後の日本の美術評論家たちは、どれだけプリューゲルを誤解してきたことか。作家や文芸評論家たちが、プリューゲル、ゴヤ、ゴッホなどの西洋の画家たちを論じると、日本の一般人も文化人も彼らの書物を通じて、その画家を理解したように錯覚する。自分の眼で観て、何冊かの解説書などを読み比べることをしない。これが大きな罫となる危険性を孕んでいる。日本の文化の浅さといってもいいかも知れないが、西洋の人々は、小説作品をもって図像学的、美術史的に説得力を持つものである、とは考えていない。

「シャボン玉飛んだ」の替え歌「プリューゲル飛んだ/ どこまで飛んだ/ 虚無まで飛んだ/ はじけて落ちた」をタイトルとした、荻野アンナ著『プリューゲル、飛んだ』(1989)は、荻野の芥川賞受賞後に書かれた作品である。荻野はヨーロッパに流れていった時、無聊を慰めるために、中野孝次の『プリューゲルへの旅』を持参したが、冒頭には「そもそものはじめは紺の紺かな」という句が置いてあって、「紺の紺」に躓いて、2行目に進めなかったことを告白している。荻野のこの小説集には、美術エッセイみたいにプリューゲルとボッシュの絵がたくさん挿入されている。[付録]として、「ボッシュとプリューゲルの納涼お盆対談」まで付いていて、荻野の司会で、いずれもたどたどしい関西弁と博多弁を操って、両者が掛け合い漫才のような対談を披露している。

茫然自失しているようで、見方によれば、どこか一点を凝視しているような、口を開けた無名で素朴な赤鼻の農婦を描いたブリューゲルの「年老いた農婦の顔」は、ひたすら生き残る農民の遅しさを表現しているのではなく、荻野は、『打たれても打たれても、打たれているのだということを認識することさえ出来ない愚鈍さ』と、そのような愚鈍さを生きぬかねばならない人間の宿命、生きぬいてしまう人間の狂気』と描写している。

「ブリューゲルは（略）野卑で、粗野かつ猥褻な農民世界への憧憬を捨てることはできなかった。ブリューゲルの描く農民の姿はすべて自らがその一員たることができないブリューゲルの悲しみをたたえてているかにみえる」と阿部謹也は、『ブリューゲル』（1984）の巻末エッセイ「ブリューゲルの『逆立ちした世界』」で論述し、ブリューゲル自身はエリート文化に属しながらも民衆文化に身をかがめていった稀有の人間であった、と評価している。

わたしは、ブリューゲル以前に、四季を通して重労働に耐え、朴訥に生きる農民の真の姿をダイナミックに描いた画家が他に存在したか否かを知らない。ともあれ、『ブリューゲル、飛んだ』は荻野流の軽妙洒脱なパロディ作品ではある。

曾野綾子著『ブリューゲルの家族』（1955）では、54歳になるひとりの主婦がダウン症といわれる知恵遅れの24歳のひとり息子をかかえて苦しんでいる。主人は60歳になるが、定年後の仕事で今まで勤めていた子会社の役員をしている。主人は東京の超一流大学の卒業であるが、妻は高卒でしかなく、結婚当初から二人の夫婦関係は冷たく、心と心が通じあっていない。そのような家庭環境のなかで、図書館でブリューゲルの画集を見つけ、心が鎮まり、母と子は救われる、という話である。障害をもつ息子をかかえた母と子がブリューゲルの絵と出会い、それを契機に自分たちの生き方を見つけていく心温まる物語である。

この本は、24章から構成され、それぞれがブリューゲルの作品のタイトルかあるいはネーデルランドの諺の部分となっている。1「日々を籠で運び出す」、2「指の上の地球」（親指の上で世界を廻す）、11「豚の前に薔薇を撒く」等々は後者に属する。

中野孝次著『ヒエロニムス・ボス「悦楽の園」を追われて』（1999）が出版されたのは、『ブリューゲルの旅』の発刊から23年後のことである。孝次が「ブリューゲルの絵を追いながらの自己の内面を探る試み」の旅から33年の年月が流れた。ボスの「悦楽の園」や「放蕩息子」などは実に興味深い対象である。後者は、聖書「ルカ伝」第15章に記された放蕩息子のテーマを描

いたものだとされている。ボスの描く放蕩息子は、聖書の中のように若者ではなく、ただ旅の途上の初老の人間である。男は褐色のぼろぼろの服を着て、右手に杖をひいている。頭巾をかぶった男の髪にも顎にも白いものが見え、男が初老に達した年齢であることを示している。男の顔、首筋、足にも疲れとやつれは見られるが、この肖像画でなによりも観る者の心をひくのは、諦念と、無力感とを含んだ目だ。「そのなんともいえぬ深い悲しみの目」は「これが人の世だ、人間の生きる現実世界とはこんなものなのだ、と言っているように見える」、と中野は「透徹して見る者の悲しみ」の章で記している。

ブリューゲルの師、ピカソもダリも遠く及ばない奇怪な幻想能力をもった謎の天才画家、ヒエロニムス・ボスの視線は、われわれ現代人に何を語りかけるのか。彼の天才的で独創的な絵を語るには、ヨーロッパに飛び、現地でボスを観ることが必要であるが、今は14時間のフライトに、心身ともに堪えないのが残念だ。

中野孝次が、1966の3月、ウィーンでブリューゲルと最初に出会ったことはすでに述べた。以来、ほぼ一年間の滞在の間、「憂鬱はしこりのようにいつも胸を嚙んでいた」がブリューゲルに出会うのはいつも大きなよるこびであった。ナポリで、ベルリンで、ブリュッセルで、ロンドンで、マドリッドで、パリで、出会ったそれらの絵は、都市の記憶とともに残った。しかし「ニューヨークでは一枚の『麦刈り』を見ただけでこんな町に用はないと思っただけである」と書いている。メトロポリタン美術館所蔵の「麦刈り」(118.0×160.7cm)は、激しい絵である。真夏の昼時、なお麦刈りに励む農夫もいれば、昼食をとったりしている人々もいる。昼食はごく簡素でパンとパップという粥と果物ぐらいである。すでに安らかな午睡についている若者もいる。この絵のような構成を「異時同図」という。たくましくて愛嬌のある、まるまっこい、ふっくらとした身体つきの農民たちだ。「人間はなんと大地と深く結びつき、生命をともにし、そして全体の生命を形作っていることだろう。人間は愚かなまま、無様なまま、あるがままにその全存在を肯定されて、大自然の中にいるのだった」、と中野はいう。大地はその豊穰な穀物の成熟と収穫に見合うだけの代償を農民の重労働に要求している。

ニューヨーカーたちがバイセンテニアル・イヴといって浮かれ騒いでいる年、わたしはこの絵をメトロポリタン美術館で観たことがある。「麦刈り」に郷愁のようなものを感じて、しばし時の流れが止まったような錯覚を覚えた。「稔るほど頭を垂れる麦穂かな」の一句もあったような気がするが、刈り入れを待つばかりに稔った穀物の黄色がじつに美しい。美術館を一步外に

であれば、アメリカ独立200年祭を目前に、熱鬧の巷では、嬉々として躍動する群衆をみた。人種の坩堝といわれるこの大都市を散策するだけでも興味津々たるものがあり、飽きることはなかった。中野と違って、「こんな町に用はない」などは、わたしは決して思わなかった。

齋藤茂吉は、「山国の農家に生息した」と書いている。中野孝次も1944年、学徒勤労動員で、農家に分宿し、その家の麦刈りを手伝ったことがある。わたしも「農の子である」からして、少年の頃、麦踏や麦刈りをした体験がある。陽に灼かれ、麦の穂は肌を刺し、腰はたえがたく痛んだけれど、成熟した麦の香りと、山里から聞こえてくる閑古鳥の透明に響く声は、疲れた身体に爽やかであった記憶がある。麦畑の中にたまたま雲雀だの山雀が巣くっていて、麦刈りの進行に合わせるように雛鳥の巣立つ瞬間を目撃したりすれば、至福の時に遭遇することになる。わたしの故郷の佐渡島では、このブリューゲルの絵のように大鎌で麦をかる習慣はない。大鎌は牧草用に普通は使われている。「鯛という名の裏山」を背負って生活した経験をもつわたしは、「麦刈り」がブリューゲルの絵の中で、一番の気に入りの作品である。

アメリカの詩人ウィリアム・カーロス・ウィリアムズは「事物の中以外には概念などない」(No ideas but in things.) といって、思想は事物のなかにしかないという自らの人生哲学をまとめてみせた。そのウィリアムズは、最後の詩集『ブリューゲルの絵』(Pictures from Brueghel and other poems)の出版により、1963年度ピューリッツァー賞を受賞している。彼は「麦刈り」という詩では、「夏だ!/ この絵は/ 一人の若い刈り手をめぐって構成されている」(Summer!/the painting is organized/ about a young/ reaper enjoying his noonday rest....)と歌いだし、午睡をむさぼる若者に焦点を据えている。また、「イカルススの墜落」という詩では、「ブリューゲルによれば/イカルスが墜落したのは/春だった」と歌いだししている。(According to Brueghel/ when Icarus fell/ it was spring/) ウィリアムズは、自らの感情を介することなく、あえて事物を事物として、きわめて寡黙に提示することによって、読む人の想像力を刺激しているのだ。

この詩人は、民衆詩人ホイットマンの弁証法的な直系として、「現代アメリカの魂」と評せられているが、これらのブリューゲルの絵の連作詩は、美術評論家たちが饒舌に百万言を駆使してもなお困難な天才画家の絵の魅力を、一見かろやかに見える詩の中で、ウィリアムズは軽々と語ってみせたのである。

中野孝次の居間には、ブリューゲルがギリシャ神話を典拠とした「イカルススの墜落」(複製：74×102cm)と同じサイズのメルサド・ベルベル「少女

像」が並んで架けられている。後者は、中野が旧ユーゴスラビアを旅行中、ベオグラードの画廊で購入したものだ。ボスニア生まれのベルベルのこの作品を彼は、「静謐な宗教性に満ちた現代のイコンとでも言いうる作風」と賞賛している。「イカルの墜落」で無心に鋤を動かしている農夫の朱色のシャツと「少女像」の基調となる緋色が好対照をなしている。農夫の耕す前方の繁みのなかに、ほとんど気づかないぐらいの小さな死体が仰向けに横たわっている。これは「いかなる鋤も死人がいるとて働きを止めない」という諺を表わしているという。海に落ちてじたばた両足を動かしているイカルのことを農夫も羊飼いや釣人もだれも気にかけていない。彼らはストア派の思想を代弁する存在で、自然の運行に逆らうことなく、与えられた場所で自分らに課せられた仕事を果たしているだけである。イギリスの詩人W. H. オーデンが「イカルの墜落」に献じた、「昔の巨匠たちは苦悩については決して誤らなかった/ その人間的地位を彼らは何とよく理解していたことか」を想起する。

先に中野のエッセイ「絵画の言葉」を引用したが、ブリュゲルの絵が左眼から、ベルベルの絵が右眼から同時に飛び込んできて、「絵が一度にすべてを語りかけて」きたら、いくら頭脳明晰で饒舌な中野であっても一瞬戸惑ってしまうのではないだろうか。わたしもいずれは不可思議な永劫の旅にでる。永劫の時が流れる、その永劫の国では、夜明けもなく、永劫に話しあえるという。僥倖に恵まれて、もし中野孝次に邂逅することができたら、まず彼の居間に架かる二枚の絵画の話から始めたい、とおもっている。

5 中野孝次と良寛禅師

ここでは、良寛と作家・中野孝次について、あるいは、中野孝次の生涯をかけて構築した「人生哲学」の中に現れる良寛像について考察していきたい。中野孝次は、ドイツ文学者であり、彼が40代になるまでは、良寛には関心はなく、もっぱらヨーロッパの、特にドイツの現代文学にのみ興味をよせていた。

中野孝次がいつ頃から良寛に関心を持ち出したのかについては、はっきりしない。1980年の「良寛没後150年展」(日本橋三越)を過ぎた頃ころから、『朝日新聞』などに書いた中野の気骨のあるエッセイのなかに良寛が言及されるようになった。エッセイの結語には、「たまらなく良寛の魅力に惹かれる」と結んであったような記憶がある。

中野孝次の『清貧の思想』(1991)は70万部という大ベストセラーとなったが、このなかに彼は、15章のうち4章を良寛に割いている。5「囊中三升

の米、炉辺一束の薪」（越後五合庵での良寛）6「独り奏す没弦琴」（良寛、山中の沈黙行）8「つきてみよ、ひふみよいむなや」（子供と遊ぶ良寛の内なる世界）17「永遠の生と出会うために」（古代インド哲学と良寛の同質性）である。これらの4章のうち、まず中野は、良寛の「円通寺」の詩を援用して、慧皎^{けいこう}の著した『高僧伝』の中の「僧は清貧を可とすべし」の一行に注目し、「清貧」をキーワードとした『清貧の思想』を世に問うたのである。

「わたしはいま年を逐うごとに年々ますます良寛が尊ばれ好かれ愛されてゆくようなのを、現代の七不思議の一つに思っている」から始まって、「清貧とはみずからの思想の表現として最も簡素な生の選択であると言いかえる必要があった」とか、「所有を必要最小限にすることが精神の活動を自由に、所有に心を奪われていては人間的な心の動きが阻害される」という言及がり、「（良寛は）鳥でも蛙でも松でも、自然界のすべての存在が、彼には自己と等しい尊い生ある存在と感じられていたことがわかります」と結んでいる。

現代では使われなくなった「清貧」という死語をテコにあって、過去の日本文化の伝統の中から、モノにとらわれず精神を自由に保ち、心ゆたかに生きることを尊重する生のモデルとして良寛を取り扱ったのである。西洋でもイギリスの詩人ワーズワースは「低く暮らし、高く思う」(Plain living and high thinking)と詩の中でうたったが、日本にも近世までは、「現生での生存は能う限り簡素にして心を風雅の世界に遊ばせることを、人間の最も高尚な生き方とする文化の伝統があった」のである。たしかに現代の日本は、実利主義一辺倒の経済大国になった。しかし、「物の生産がいくらゆたかになっても、それは生活の幸福とは必ずしも結びつかない。幸福な生のためには物とちがう原理が必要である」と日本人がようやく気づきはじめた時期の1992年に、日本のバブルがはじけた。この年、『清貧の思想』が刊行されると、この本は爆発的な評判を呼んだ。中野は、一躍超人気作家となり、TVにも顔をだすし、雑誌などのマスメディアに囲まれもした。それから生活の規範を説く、彼の人生読本が数多く出版されるようになった。清貧の理想の生活のありようを書いた作家が、『清貧の思想』を70万部を売りつくして、富裕層の仲間入りをするというのも人生の皮肉のような気がしないわけでもないが、中野は、豪華な個人生活を享受した。常々、「良寛の真似はおれにはできない」と豪語する、中野らしい生きざまでもいったらいいのか。一方、彼はベストセラー弊害にも苦しんだ。中野家にかかってくる電話がごとごとく講演依頼で、しかも法外な講演料をちらつかせて、引き受けさせようとする人々にも辟易した。以後、電話やファックスなどすべての機器を遠ざけ、

隠遁者のような生活をした。といっても、中野は、日本人が本来持ち合わせた、実生活に貫かれた節度や謙虚さを踏み外すことなく、良寛のように、簡素な暮らしの中で心の豊かさを求めた言行一致の文学者であり続けた。

1995年に発刊された『良寛の呼ぶ聲』は、良寛の単行本としては、はじめての本で、構想4年の書き下ろしということになる。「良寛とはいったい何者なのか」「良寛とはどういう存在なのか」という問いからはじまる本書は、第一章から第六章までの構成であり、それぞれに4個の小見出しが付いる。1章「捨てるとはどういうことか」（愚であるということ）、第2章「臆々任天真」（孤貧は生涯）、第3章「吾詩はすなわち我なり」（自己凝視の人）、第4章「良寛の歌」（淋しさ、心細さ、苦しさ）第5章「良寛の漢詩」（老いて孤独な草庵の生の悲哀）第6章「愛語と戒語」（非説教者、非教育者）から成っている。

良寛と自分とを比較して、中野は次のようにいっている。「良寛は気が長くのんびりした人だったらしいのに対し、わたしは気が短くせっかちである。彼は「言葉の多き。口のはやき。さしで口。手がら話」を戒めたが、わたしは、現代人並に口は早く口数は多い。彼はその無名、無所有の貧しい生に「^{ゆうゆう}優遊」としていられたが、わたしにはとうていそれに耐えられそうにない。単に現代の快適さと便利さとに甘やかされているだけではなく、そういう徹底した無所有の貧しさ、不便、苦痛に耐えられないのである」と述懐している。

良寛は世捨て人であり、社会のはみ出し者であった。彼の生の原理が、社会を構成し営む原理となり得ないことはいうまでもない。良寛のような生き方をする人ばかりだったら人間社会は成り立たないのだ。では、なぜその普通の生の否定形であるようなネガティブな彼の生き方が、このようにわれわれ現代人の心をとらえ、惹き付けるのであろうか。

上記のような自問をして、中野は「良寛という存在が世間一般の生に対して持つ意味がわかったように思った」と述べている。「良寛に触れることで世の人はみずからの生き方をおのずと反省させられるのである。自分の生き方の正不正、善し悪し、高雅か卑俗か、欲ぼけかどうか、親切か冷酷か、慈愛か邪険か、そういう道徳的な面のみならず、心のありようそのものを焙り出されるような気がしてくるのだ」と。要するに良寛とは、世間一般の人間の生にたいするクリテリウム（Kriterium: 試金石・判断の基準）なのである。「つまり人は良寛という不思議な存在に触れることによってひとりで己の生き方を顧みさせられる、良寛とはそういう存在なのだ」という結論を中野は得たのである。この本は、真正面から良寛に向き合って、良寛像を

デッサンした、本格的な良寛論である。

1997年に発行された『良寛に会う旅』は、良寛が生きた越後の舞台を訪ね、良寛の托鉢行脚したあたりに立ち、来し方をしのぶ紀行文である。良寛書の編集者で研究家・松本市壽と国学院大学時代にドイツ語の教え子であった新潟市在住の上田茂を道案内に立てている。中野は「上田君は二十年前わたしが国学院時分に学生だった男で、藍より出でて藍よりも青く、教師よりドイツ語がよくできるくらいだった。当然学者になるべく予定していたが、ひとり息子なので家業を継ぎ、その営む新潟眼鏡院は越後随一という評判をとっている」と元学生を持ち上げている。このような恩師とは、まことにありがたい存在である。

目次は「冬の越後路に良寛遺跡を訪ねて」「冬の良寛紀行」「良寛書の原風景」「良寛一没弦琴のしらべ」「個にして弧なる人、良寛」「あとがき」という構成になっている。中野の端正な文体に添えて、遠藤純（芸術新聞社）のカラー写真も豊富に取り入れられ、見事な出来栄である。

中野は「越後の海沿いの各地を回ってみて、ちょっと陸に入ると地勢がいかに穏やかで優しいのに感銘をうけた。低い山が入り組んだ中に田がひらけ、山には松があり、住みやすい所のように見えた。(略)そしてともかく良寛は、こういう冬はきびしいかもしれないが地勢は穏やかで優しいところに生まれそだち、そして托鉢して回ったのである。わたしは人のあまりいない田舎道を墨染めの衣をきた良寛が托鉢してまわる姿を想像しようとしたが、うまく像をむすばなかった」という感想を述べている。

次に、2000年に発刊された『風の良寛』は、『良寛の呼ぶ聲』を契機として、中野はこのあとさらに良寛の死や書について書く機会が何度もあり、その度に良寛に深入りしていった。一方、中国の『老子』『荘子』といった良寛が親しんでいた中国古典や良寛が最も崇めることの篤かった道元の『正法眼蔵』を徹底的に読み解き、そっちの側から良寛を見ていく。すると前にはっきり特定できなかった良寛の思想的背景、ないし系譜が、見えてくるのであった。それは一言でいえば「無」の世界である。わたしたち普通の人間は、社会に関わって生きている。つまり「有」の世界にいるのである。それにたいして良寛は出家して、社会を捨てる決心をして以来、生涯ずっと身を無の側において生きた。『良寛の呼ぶ聲』では、中野は「捨てる」ことの意味を重視して、始終そのことに触れてきたが、捨てることの先を開ける風景が無であると仮定したとき、中野は良寛を完全に理解できた。

目次を辿ってみると、1「なぜ今良寛か」2「良寛に惹かれて」3「無為」4「修行（一）」5「棄てるということ」6「愚の如くして道転寛し」7「生涯、

何の似る所ぞ」8「情の深さ」9「修行（二）」10「生を楽しむ」11「弱い身にもかかわらず」12「天真に任す」13「晩年の花やぎ」14「現代と良寛」等々である。

『良寛の呼ぶ聲』では、真正面から良寛に向き合って、良寛像をデッサンした本格的な良寛論であることは、先ほど記した。『風の良寛』では、良寛は社会を棄て、親を棄て、兄弟姉妹を棄て、師匠や友達を棄てる決心をして出雲崎の生家を飛び出して以来、生涯ずっと身を「無の側」に身を置いてきた。何もかも棄てることの意味を重視して展開してきた中野の「良寛論」の結論は、棄てることの先に開ける無の風景であったのである。若い頃から西洋文学を研究し、西洋の文学をいったんくぐり抜けた中野が、やがて日本の古典に回帰して、中国や日本の古典を渉猟した後に、良寛の人生哲学に辿りついた、見事な成果をこの本にみることができる。

2002年に出版された『良寛 心のうた』は、わけてもわたしが好きな本だ。「むらぎもの心楽しみも」「世の中にまじらぬとには」「淡雪の中に顕ちたる」などとインデックスを付けて、いつも携行する愛読書である。「良寛一人百首」の趣きがある。表紙には、『『月の兎』は良寛の慈悲の思想を描いた思想詩だ』と書いてあり、中野の個性的な自筆を鑑賞することができる。

本書の冒頭で、「わたしは良寛の歌や詩が好きで、これはずいぶん親しんできた。好きという感情はどうしようもなく、好きだからおのずと親しむ、そこになんの理屈もない。あらゆる文学作品にわたしはつねにそういうふうにして親しんできた。個々の作品に親しんでいるうちに、しかし、いったいこれはどういう人なのかと、作り手の全体像を知りたい要求が起ってくるのも当然である。その全体像は一人ひとりの読者が創りあげる仮説だ」と中野は述べている。

この本の構成は第1章から第4章までの構成で、1～16の小見出しが付いている。詳しくは、第1章「自在に遊ぶ人 1 小山田の山田の蛙 2 子供と遊ぶ人 3 春のよろこび」第2章「ひとり楽しむ人 4 山中独居 5 食を乞う 6 定珍と 7 冬ごもり」第3章「死を視る人 8 ユーモア 9 ひとり遊び 10 子を悼む 11 老いと病と 12 なき人」第4章「季節と戯れる人 13 夏のうた 14 秋のうた 15 冬のうた 16 拾遺」となっている。

「天地と一つになる呼吸法」の小見出しで春のよろこびを歌った、良寛のよく知られた歌をひいている。また、良寛は「ひとり遊び」も大好きであった。

むらぎもの心楽しみも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば

あしひきの岩間をつたふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも
世の中にまじらぬとはあらねどもひとり遊びぞ我はまされる

アララギ派の歌人・伊藤左千夫は、良寛の歌について、「禅師の歌には、想平凡にして材料の陳腐なるものあり。然も全体として平凡ならざる所以のものは、作者の生活即ち歌なるがゆえなり」といっているが、良寛の本質を衝いている言葉であるとおもう。

中野は「良寛の真骨頂は、こういう単純明快で親しみやすく、しかも内容の充実した、口ずさんでいるといい気持ちにしてくれる歌にある、とわたしは思う」と述べている。厳しくて長い越後の冬は有名で、鈴木牧之の『北越雪譜』には、一年で雪の降らないのは、わずか4ヶ月だけ、と記されている。良寛は、五合庵で冬眠生活を余儀なくされたので、春が来ただけで彼は楽しくてならないのだが、その上こうして鳥まで群がり集まって遊び戯れているのを見ると、なんともいえぬ幸福感につつまれてくることだよ、というのだ。良寛のみちたりた心のよろこびが、歌からじかにこちらに伝わってくる。良寛以外の誰もうたいえない、良寛だけの歌境といえるのではないだろうか。こういう歌になると、良寛の自我は消えて自然の中に溶けいり、自然と一体になって、天地の鼓動を喜んでいるような感じがする。鳥と良寛が同じ太陽を浴び、同じ空気を呼吸し、命を同じくしている感がある。

中野は本書を「良寛の歌は、良寛という人間のそのものの流露だった。すなわち本物の文学だった。だから、平凡なものがあっても、平凡までが生きていたのである。良寛の歌をよむには、そこに良寛その人を見るのがよく、万葉調だのという分析をしたところで、良寛について何事を言ったことにもなるまい」と結んでいる。さすがに、良寛の人となりや良寛の詩歌の精髓を慧眼をもって見抜いているのである。

中野の良寛書として、最後の書となったのは、『良寛に生きて死す』であるが、編集者がつけたタイトルが示すとおり、中野の死後（2005.1）に出版された。本書の帯の「アイ・キャッチ」には、「良寛に親しんでの喜び、良寛からの啓示とメッセージ、病や死に自分が直面した際の動揺とやすらぎ、そして死後への遺言。それは清貧の人・中野孝次の生涯をかけた思想の結実である」となっている。「目次」にはローマ数字の大文字で、Ⅰ 命のうたしらべ（越後の春風の中に手毬をつく）Ⅱ 良寛の啓示をうけて（セネカと良寛とシレジウス）Ⅲ 現代人にとって良寛とは（対談者：北嶋藤郷）Ⅳ わが死に寄せする最後の言葉（闘病、そして小康）等々から構成されている。

中野が「日暮れ、道遠し。吾が生既に蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり」

という『徒然草』のアフォリズムを唱え、自主定年と称して大学教授の椅子を放擲し、文筆一本で生活する決意をしたのは、50代半ばのことであった。秀夫人には、「また貧乏を覚悟してくれ」といわれた。無一物になることを覚悟しないと自由というものは得られない、という想を中野は生涯に亘って抱いていたのだ。「教師廃業の弁」（『文学界』昭和55.2.）には、「今後は書かなければ食えないという状況に身を置いたことにも、暖房の利いた部屋から霜のおりた冬の朝にとびだしたくらいの、新鮮な刺激があるのである」と記している。

ある夏、良寛研究家の松本市壽の手引きで、横浜・洋光台の中野孝次邸を訪問したことがある。昼下がりの広く閑静な庭には、柴犬の親子が遊び、時には、ながながと背伸びしたりして、のんびりとした雰囲気は漂っていた。谷崎の『陰影礼讃』を思わせる構えの玄関を入ると、中野は上機嫌でわたしたちを迎え入れてくれた。新潟県文化振興課の企画で、2003年9月21日「新潟の文化を考えるフォーラム」で中野孝次とわたしが良寛について「対談」することになっていた。ならば、可能であれば、下打ち合わせのつもりで、遠路はるばる中野邸を訪問したのであった。中野は浴衣の着流し姿で、実生活上の主義主張から冷房装置は無かったが、彼は意気軒昂であった。

話題は、中野が訳出中の「ローマの哲人セネカの手紙」が中心であった。ラテン語とドイツ語訳の対訳本を書齋から持ち出してきて、「若い頃、もう少しラテン語を勉強しておけばよかったな」といわれた。わたしには、「セネカを英訳でも読みたいから、適当な洋書店を紹介してほしい」と要望された。

この間、母のハンナであるか娘のナナであるか、あるいはそのどちらかであるかもしれないが、犬が窓辺によってくると、中野は話を中断して、そつと一尺ほどガラス戸を開けてやったりした。柴犬たちは、代わる代わる悠揚迫らぬ態度で客間の中に入り、わたしたちを観察し、また手入れのゆきとどいた芝生の庭へ出て行く。中野はそつと戸を閉める。何回もこの動作を繰り返しながら、愛犬を見つめる彼の慈愛に満ちた温顔がまことに印象的であった。

中野邸での話は多岐におよんだが、新潟で予定されているフォーラムの話しはついにしななかった。最後に中野は新刊書の『「閑」のある生き方』に揮毫され、記念としてわたしにくださった。ご令聞との短い会話と美味しいお茶、そして冷やした梨と葡萄をいただいたが、その味も忘れられないものがあつた。

中野邸訪問の約一ヵ月後、「新潟の文化を考えるフォーラム」が新潟市で

開催され、中野孝次とわたしが対談した。そのテーマは、「現代人の生き方にとって良寛とは何か」であった。下打ち合わせなど一切なしのぶつつけ本番の対談であった。中野は、下手に準備され、あれこれと作られたものより、そのほうが臨場感もあってずっと面白い、と考えていたようだ。高名なドイツ文学者で作家の中野孝次と生涯一英学徒にすぎないわたしと「対談」をさせた意図は一体何であったのか。それは、どちらも一度外国文学をくぐり抜けてきて、日本の古典や良寛の草庵の思想にも関心をもつ者同士であるという共通項をもっている、と文化振興課のスタッフが考えたのではないかと推測している。

「対談」において、舞台照明が明るすぎると注文をつけたあと、冒頭でいきなり中野が「皆さんへの五つのお土産」と称して、良寛が後世に残した五つの教えを熱く語った。中野は端然とした姿勢で、人の心から心へと通う話をした。ああ、彼は本気になって聴衆に話しかけている。間近にいて、講演とはこういうものか、とわたしは驚いた。話者と聴者が一体となり感動が生まれた。その日彼が記念に残していった、彼の手書きの原稿からそれらを再現すると、次のようになる。

1. 物欲を捨てよ 2. 今の為に生きよ 3. ゼロに返る訓練を為せ 4. 身を閑の中に置け 5. 世間の決まりに従うな、皆と同じにするな。自分が考えて正しいように生きよ。これが人間を幸福に導く唯一の道である。

「新潟の文化を考えるフォーラム」会場には、平山郁夫新潟県知事、篠田昭新潟市長などの姿もあった。とくに、篠田市長は元新聞記者であるので、『市報にいがた』(9)に詳しくこのフォーラムを再現されている。市長の言葉では、次のように記録されている。

1. (物欲や所属など)すべてを棄てる精神 2. (昨日も明日もない)絶対的な今を生きる心 3. たえずゼロの状態に身を置くこと 4. 身を閑におく(何もしない状態だからこそ心の声が聞こえる) 5. 自らの考えで正しいように生きよ(横並びや世間並みが好きな日本人にとって大変難しいことですが、それだけに引かれるものも大きいのかもしれません。)

中野孝次の不朽の名著『清貧の思想』には、生き方として欲張らずに、清雅に暮らす良寛をたたえた文章がある。また、既に述べたように、単著としても『良寛の呼ぶ聲』『良寛に会う旅』『良寛心のうた』などの好書もある。

最晩年(2004. 3)に、中野孝次は日本芸術院賞と恩賜賞に輝いた。受賞理由としては、「西洋文学の研究者でありながら、日本文化における豊かな精神のあり方を追求した功績を高く評価された」からである。受賞対象作品には、『風の良寛』が入っていた。しかし中野はこの時すでに病状も篤く、6

月7日の授賞式に出席することはできなくて、岩波書店の社長・山口昭男が代行して受賞式に臨んだ。

2004年7月22日の夕刻、中野孝次の訃報を知らせてくれたのは、国学院大学時代から、ドイツ文学の愛弟子である上田茂であった。「中野先生がお亡くなりになりました」、という短い電話である。中野の新刊書、『セネカ現代人への手紙』が拙宅宛に送られてきたのが5月末であった。その「あとがき」に、〈セネカの哲学とわたしのガン体験〉とあったので、中野が食道癌に侵されていたことは承知していた。ガンが早期発見であったこと、転移してはいなく、進行性でないことになどにより、治療可能の部類に入るものらしい、と書かれてあった。したがって、この作家は不死鳥のように蘇り、すぐにまた旺盛な執筆活動に復帰されるものと信じていたから、上田からの夜の電話にわたしはすっかり仰天して言葉を失ってしまった。

好著『「はちすの露」を読む』で知られる文芸評論家・喜多上からの私信には、「中野孝次氏が逝去され、大変驚きました。健康な御生活をされているのでまさかとの思いがありましたが、「対談」で自分は2004年に死ぬとおっしゃっており、そのとおりになっていました。自らの命数を知っておられたのでしょうか。としますと、現代の賢者かもしれません。今となつては氏の最後の対談となったのでしょうか。良寛と現代との対立点を五つにまとめられ、これらが中野氏の思索の帰着となったようです。氏らしい明快な切り口で、ある種の覚悟に裏打ちされた決断の美しさでもというべきほてりが感じ取れます」と認められている。これは中野の本質を衝いた見事な文章であるとおもう。

雑誌『良寛』に、中野孝次のエッセイ「良寛つれづれ」が載るのをわたしは毎回楽しみにしていたが、第三回の「病と良寛」が絶筆となってしまった。「人間は死を免れることはできない。とは、人間は運命のもたらすあらゆる災厄をも免れることができないということだ」と結んでいる。良寛の平安を支えた覚悟の中には、そういう覚悟もあったのだ。これこそ良寛が現代人に与える教え—草庵の思想—の最たるものであろうとわたしは思う。これは中野のわれわれに残した遺書といってもさしつかえない。彼が渾身の力を振った残す言葉であり、同時に凄い箴言でもある。

わたしは、8月29日に信州須坂浄運寺まで墓参に出かけた。風光明媚な丘の上の墓地のほぼ中央に中野孝次の五輪塔があった。鎌倉東慶寺にある小林秀雄の墓の五輪塔が気に入ったので、石屋にそれを見に行つて貰い、そういう姿のものを作らせていた。石屋も精魂込めて仕事をしたらしく、どっしりとした風格のある五輪塔である。生前の中野は、「わたしは完全に満足した」

と「夫婦と愛するものたちの墓」というエッセイに書いている。墓石の両脇には、一週間前の納骨式で手向けられたであろう、真っ赤な石榴が数個、午後の陽光を浴びて、鮮やかな朱を燃えたたせていた。石榴は、愛犬ハラスの眠るご自宅の庭から、秀未亡人が持参したものだと思われた。「ここに眠るは/中野孝次/中野 秀/ その愛せし者たち」と墓誌にもあるように、ハラスなど夫婦が愛した犬たちの遺骸もやがてここに移され、狒犬よろしく主人の霊を守るのであろうか。「死に際しての処置」を妻に託され、「死はさしたる事柄に非ず 生の時は生あるのみ 死のときは死あるのみ、悲しむべきことに非ざるが故に」と書き残した中野の心情を思うと胸を衝かれる思いがした。むごいようだが、それが生と死ということかもしれないと思う。既述したように、埴谷雄高の『永久革命者の悲哀』には、「死んだ者はもう帰ってこない/生きている者は生きてることしか語らない」とある。あえてそんなふうにも思わなければ、辛い思いをふりはらうことはできないのである。

2005年9月17日、中野の書斎に続く2畳の部屋で、中野孝次の遺稿『ガン日記』が秀夫人と筆者により発見された。中野が癌の宣告をうけてからは、布団を持ち込み、畳の上の文台で仕事をするが多かった。芭蕉の「文台引下せば則ち反故ほんご」という言葉がある。歌仙を巻き終えれば、ひとは一個の無名者として、容赦のない時の流れのなかに忘却される。中野はその覚悟をもった文士であった。文語体で書かれたゆえにいっそう悲壮感に溢れた遺稿があることを、生前、秀夫人にすら漏らしてはいなかった。

読み返すたびに、中野の死と向き合う覚悟の凄さに感激するのだが、ここで彼の残した「予の遺言書」（『大法輪』2002.12）の一部を掲げておきたい。

- 一、予が死亡に際しては、さしあたり次のとおり取りはかられたし。
 - ・死はただちに公表せず、肉親のみで密葬すること。
 - ・死体は決して他人に見せまじきこと。
 - ・骨は信州須坂浄運寺に持参し、簡単な読経ののち埋葬すること。
 - ・死後三週間を経て公表すること。
 - ・告別式、偲ぶ会の如きはせざること。
- 一、だれにも知られず消えてゆくが予の願いなれば、万事その旨にて行うべし。
- 一、中野基金は、発展途上国の孤児、飢えた子供、ストリート・チルドレン、発展途上国などの救済のために使うべし。その方途は基金理事長 成瀬重人の判断にまかす。
- 一、著作権は神奈川近代文学館に委ね、同館の特別運動基金とすること。

以上なり。予はすでに墓誌に記せる如く、十九歳第五高等学校に遊学以来、文学を愛し、生涯の業とせり。戦後の窮乏時代には文学を以って生きることにはなほだ困難なりしも、素志を貫き、以来ただ文学一筋に生きたり。これを誇りとす。(略)

わが志・わが思想・わが願いはすべて、わが著作の中にあり。予は喜びも悲しみもすべて文学に托して生きたり。予を偲ぶ者あらば、予が著作を見よ。

予に関わりしすべての人に感謝す。さらば。

これが文士というものの本懐であろう。晩年の中野は、古武士の風貌すらたたえていたように感じられた。精神科医・作家の加賀乙彦は、「好漢中野孝次よ、さらば」(『群像』平成16.9)で、「良寛の教えにしたがって人の冠婚葬祭には一切出席しないという彼らしく、自分のことを友人にも知らせずに往ってしまった」で始まる追悼文を寄せている。硬質の文体であるが、哀切きわまりない。

中野夫妻には子供がいないので、この家庭の秀未亡人が果てた後は、その資産を中野基金に全面的に譲渡して、発展途上国のこれからという子供たちに役立つ社会貢献を指示しているのは、まことに見上げた志というべきである。「わが志・わが思想・わが願いはすべて、わが著作の中にあり。予は喜びも悲しみもすべて文学に托して生きたり。予を偲ぶ者あらば、予が著作を見よ」という。これだけの矜持と情熱とを高らかに宣言し、そして逝った文学者に、わたしはかつて出会ったことはない。

2006年7月1日、「中野孝次展—今ここに生きる」(神奈川近代文学館)の記念講演で、前『文藝春秋臨時増刊』編集長・高橋一清は、「作家・中野孝次の生き方」と題して、中野孝次の担当編集者として、彼の文学の伴走者として、28年の思い出を語っている。「(中野)先生は驕ることのない、知って知ってなお神秘を知る人でありました。(略)文学者が特権階級でも知的エリートでもない、日常生活を大切に生きる一人の日本人、一人の生活者なんだということを中野先生はよく分かっておられた、私はそのように思います」と。この一般の人々と同じ生活意識があったからこそ、地道に生きる中高年の人たちが、彼の書いた人生哲学書を信頼して、愛読したのである。中野は、喜びも悲しみもすべて文学に托して生き、太平洋戦争後の日本を代表する作家の一人として、気骨ある文体を駆使して、成熟した大人の文学ともいえる、独自の文学の見事な結実をみたのである。

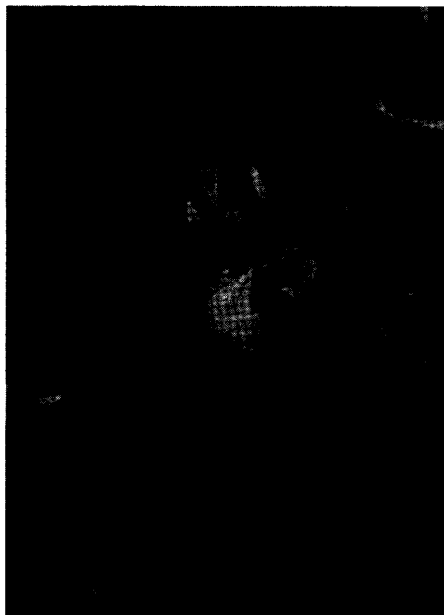
中野孝次の長年の盟友であり、慧眼の文芸評論家・秋山駿は、「生きる心

の敵から」という文章のなかで、「中野孝次は、まず自分を真剣に生きること、それを文学の髄にした。自分を真剣に生きる。どんな人も、自分は真剣に生きていると思っているだろうが、実は、これが容易な業ではない。なぜなら、一日の休みもなしに、絶えず、自分は何者か、自分が生きていることにどんな意味があるか、と問うていなければならないからである。そんな真剣な生の歩行の産み出した畝が、つまり、中野さんの文学である。生きる心の敵から発せられた言葉や文章がある。だから、それは人の心に直裁に響く。ああ、この作家は嘘を言ってはいない、信じられる、と。それが文学として本物であるということだ」と語っている。

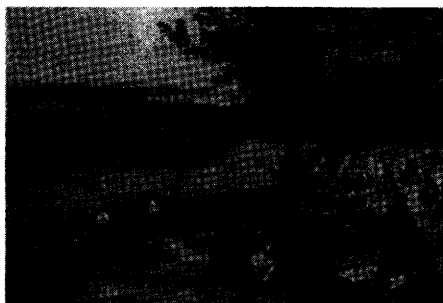


サウルの自殺

(『ブリューゲル』(カンヴァス世界の大家11:中央公論新社)、2001 から転載)



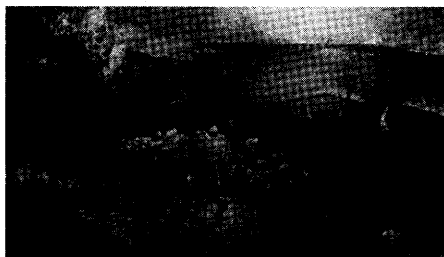
狂女フリート



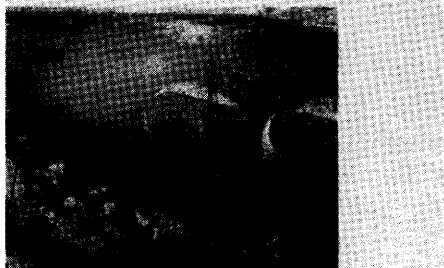
麦刈り 1865年 ニューヨーク メトロポリタン美術館蔵



麦刈り



イカルの墜落 1556年頃 ブリュッセル 王立美術館蔵



同上 (部分)

イカルの墜落



紋首台にかさぎのいる風景 1568年
グルムシュタット ヘッセン州立美術館蔵

紋首台にかさぎのいる風景

(中野孝次『ブリューゲルへの旅』(文春文庫)、2004 から転載)

参考文献

- 本稿は、下記の諸氏からの著書・講演などでお世話になった。記して謝意を述べたい。
- 敬和学園大学「中野孝次記念文庫」は、北垣宗治前学長と元図書館長・柴沼晶子教授の時期に、近代ドイツ文学者兼作家・中野孝次氏自身が『中野孝次作品集』（全10）などを含む数箱を本学に寄贈してくれたことにはじまる。さらに2007年8月、中野秀さんから、作家・中野孝次への贈呈本を中心とした稀観書8箱が贈られた。本学図書館の特色のひとつとして、また貴重な中野孝次文学の文献として、学生諸君のみならず地域の方々にも末長く活用していただきたい。
 - 2005年1月、豪雪の本学において、『ブリューゲル全作品』、『ブリューゲル諺の世界』などで知られる、森 洋子氏の連続公開講演があった。豊富な資料や映像でブリューゲルを熱く語る氏の講演に心が泡立つような興奮を覚えた。氏は、1992年、評論等部門で芸術選奨文部大臣賞と1996年、ベルギーのウジェーヌ・ベエ国際賞に輝いた、日本におけるブリューゲル研究の第一人者である。これを契機として、本学図書館へ森氏からもブリューゲル関係の数冊の稀観本の贈呈を受けた。
 - 本学図書館は、ネーデルランドの民話的人物を描いた、ブリューゲルの「悪女フリート」(複製)を所蔵する。アントヴェルペン マイヤー・ファン・デン・ベルク美術館を訪れた上田 茂氏からの寄贈になるものだ。上田氏は、国学院大学において、ノサックの『文学という弱い立場』などをドイツ語の原書講読で恩師・中野孝次先生から学んだ。(日々この絵に接していると、森洋子氏の言い草ではないが、ドゥレ・フリートは悪女ではなくトップガールに見えてくるから不思議だ。)

作品

- 中野孝次『わが少年記』彌生書房、1996。
 中野孝次『光るカンナ肩』小学館、1996。
 中野孝次『麦熟るる日に』河出書房新社、1978。
 中野孝次『苦い夏』河出書房新社、1980。
 中野孝次『花下遊楽』彌生書房、1993。
 中野孝次『実朝考 ホモ・レリギオーズスの文学』河出書房新社、1977。
 中野孝次『ブリューゲルへの旅』河出書房新社、1976。
 中野孝次『五十年目の日章旗』文藝春秋社、1996。
 中野孝次『ぼくと兄の日章旗』ポプラ社、1995。
 中野孝次『清貧の思想』草思社、1992。
 中野孝次『良寛の呼ぶ聲』春秋社、1995。
 中野孝次『良寛に会う旅』春秋社、1997。
 中野孝次『風の良寛』集英社、2000。
 中野孝次『良寛 心のうた』講談社+α新書、2002。
 中野孝次『良寛に生きて死す』考古堂、2005。
 中野孝次『「閑」のある生き方』新潮社、2003。
 中野孝次『ローマの哲人セネカの手紙』岩波書店、2004。
 中野孝次『ガン日記』文藝春秋社、2007。
 中野孝次『中野孝次作品01』作品社、2001。(富岡幸一郎解説、pp. 468-478)
 中野孝次『絶対零度の文学 大岡昇平論』集英社、1976。
 中野孝次『対談 小説作法』文藝春秋社、1983。(野間宏との対談、pp. 47-80)
 中野孝次『ヒエロニムス・ボス「悦楽の園」を追われて』小学館、1999。

- 野間 宏『暗い絵』旺文社文庫、1974。
 荻野アンナ『ブリューゲル、飛んだ』「新潮」1989.10。
 曾野綾子『ブリューゲルの家族』光文社、1995。
 齊藤茂吉『齊藤茂吉全集』第五巻、岩波書店、1973。pp. 125-129, p. 899。

著書

- 森 洋子『ブリューゲル全作品』中央公論社、1988。
 森 洋子『ブリューゲルの諺の世界』白鳳社、1992。
 森 洋子『ブリューゲル探訪－民衆文化のエネルギー』未来社、2008。
 (作品解説)『ブリューゲル』カンヴァス世界の大家11、中央公論社、1984。
 W.C. ウィリアムズ詩集『ブリューゲルの絵その他の詩集』アスフォデルの会編訳 国
 文社、1982。
 Yoko Mori : "The Appreciation of Bruegel in Japan" Japan & Belgium, Four Centuries of
 Exchange 2005. pp. 386-395。
 Yoko Mori "BRUEGEL'S NETHERLANDISH PROVERBS AND CORRESPONDING
 IMAGRES IN OLD JAPANESE ART" *Acta Historiae Artium, Tomus 44, 2003.*
PICTURES FROM BRUEGHEL: The Collected Poems of William Carlos Williams:
 Volume II 1939-1962 Edited by Christopher MacGowan. A New Directions Book,
 1988。
 ローズ＝マリー・ハーゲン他『ピーテル・ブリューゲル』TASCHEN、2002。
 竹内 洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003。
 新潮日本文学アルバム『齊藤茂吉』新潮社、1995。
 山口茂吉他編『齊藤茂吉歌集』岩波書店、1991。pp. 86-93。

雑誌

- 『大法輪』(平成14年12月号)「特集1 私の遺言：中野孝次「予の遺言書」 pp. 107-108。
 『文藝春秋 特別版』(平成16年9月臨時増刊号) 特別掲載「最後の言葉」中野孝次「縁
 <感想>」 pp. 154-155。
 『文藝春秋』(平成18年7月号) 中野孝次「ガン日記」(独占掲載) pp. 261-286。
 『良寛』第46号(平成16年12月発行) 北嶋藤郷「追悼 中野孝次先生－良寛と草庵の思
 想」 pp. 126-128。

図録

- 『中野孝次展－今ここに生きる』会期：2006年6月10日～7月30日、会場：県立神奈川
 近代文学館。

年報

- 『神奈川近代文学館』2006年(平成18年度)「中野孝次展－今ここに生きる」記念講演
 会議録：前『文藝春秋臨時増刊』編集長・高橋一清「作家・中野孝次の生き方－担
 当編集者28年の思い出」 pp. 4-17。